

## 序

中西健治先生は、立命館大学大学院文学研究科修士課程を一九七六年に修了され、兵庫県下の高等学校教諭をお務めになった後、一九九〇年に相愛大学人文学部助教授、一九九二年同教授に就任されました。二〇〇四年には本学文学部日本文学専攻の教授として赴任され、九年間という短い期間ではありましたが、本学の教育・研究・行政に力を尽くしてこられました。この間、数度にわたる日本文学専攻の主任などをお務めになり、学部・大学・大学院の発展に寄与されました。

一方、先生は、中古文学会、日本文芸学会、解釈学会、和歌文学会など多くの学会でご活躍され、ご専門の中古文学（平安後期文学）のご研究で数多くのめざましい成果を挙げておられます。とりわけ、『浜松中納言物語』の研究においては、学界からも第一人者として評価されてきました。先生のご業績については、本論集の「主要著書・論文目録」に詳しいので繰り返しません。これらのご研究によって二〇〇六年には博士（文学 立命館大学）の学位を取得されたことは特筆しておきたいと思えます。

さらに、先生は、その教育・研究を通して優秀な研究者・教育者を多くお育てになりました。次の時代の日本文学を担う人材が、先生の教えを受け、広く活躍しています。

中西先生は、大変に控え目なお人柄ですが、中古文学全般に通じた篤実な文献学的研究者として、いつも周りから頼りにされる存在でした。日本文学の中でも、とりわけ中古文学の分野は『源氏物語』や『枕草子』などの著名な作品で知られる分野ではありますが、先生が長きにわたってご研究を行ってきた『浜松中納言物語』はその影響力の大きさにもかかわらず、作者や題名についても不明な点が多く、多くの写本・伝本を渉猟しての大変根気のいる検討が要請される作品であります。しかし、私にはそれは先生のご性格と共鳴しあっているものだと思うことが何度もありました。地味ながらも大変丁寧な作業を厭わない先生の態度に接するたびに、それは先生のご研究姿勢のなせる業に違いを感じいった次第でありました。あるいは、さまざまな会議の場でも、先生のご発言は、学生や院生を思いやる大变心のこもったものであり、それは丁寧な教育活動やさらに母校に対する愛情によって育まれてきたものであったと思えます。

こうした意味からも、文学部の学域・専攻制への本格的移行が進行中に、先生がご定年を迎えられることは残念でなりません。今後とも、

文学部・日本文学研究学域・日本文化情報学専攻へのご助言をいただきたく願っております。

本会は、先生のご功績と学恩とに深い謝意を表し、ご定年を記念する論集を編み、先生に献呈させていただきます。ありがとうございます。ありがとうございました。

二〇一三年二月

立命館大学人文学会会長

文学部長 桂 島 宣 弘